

■名古屋学芸大学 教養・学際編 研究紀要 創刊号 2005年2月

もう一つの『智恵子抄』

Another Version of Chiekoshou

大島 龍彦

Tatsuhiko OSHIMA

1. はじめに

升谷裕子に本稿と同名タイトル、「もうひとつの『智恵子抄』」（『和洋国文研究25』和洋女子大学国語国文学会・平成2年3月）がある。

升谷のいう「もうひとつの『智恵子抄』の「もうひとつ」とは、「愛の詩集」「高村の独り角力」「凄絶な『殉教』」「首狩り」あるいは「悲劇の書」といった『智恵子抄』への先人の評価に対する、『智恵子抄』中の「智恵子伝説」の再評価⁽¹⁾のことであり、本稿の「もう一つの『智恵子抄』の「もう一つ」とは意味が違う。本稿の「もう一つ」とは、白玉書房から出版された『智恵子抄』のことである。

嘗て拙論『「智恵子抄」のかたち』⁽²⁾の中で、「本当の『智恵子抄』は、これ一つしかない」と、私は主張した。「これ」というのは、昭和十六年八月に龍星閣から発行された『智恵子抄』のことである。

昭和三十一年七月に新潮文庫の一冊として刊行された『智恵子抄』の「覚え書」で、草野心平が「智恵子さんとの関聯が詩の中心をなしていないので故意にはぶいた」⁽³⁾という「或る日の記」を挿入し、「荒涼たる帰宅」を「梅酒」の後ではなく、「レモン哀歌」に連続させ、「涙」「からくりうた」「梟の族」「人に」（『智恵子抄』冒頭の詩とは別）「淫心」「金」の六編を省いた、昭和十六年までに制作した智恵子関連の二十九編の詩と、短歌六首、「智恵子の半生」「九十九里浜の

初夏「智恵子の切抜絵」の散文と目次によって構成されているものを、本当の『智恵子抄』だと主張したのである。

しかし、最近、期間限定で、もう一つの『智恵子抄』を認めてもよいのではないかという思いがある。それが白玉書房が昭和二十二年十一月二十五日奥付で発行した『智恵子抄』である。該本は、龍星閣発行の『智恵子抄』の構成要素に加え、戦後の作詩「松庵寺」と「報告」、それに高村が白玉書房発行の『智恵子抄』に寄せた、「小文は序といふほどのものではないので、後記のやうにして下さい」という「記」からなる。

そこで、本稿では白玉書房から出版されたもう一つの『智恵子抄』を、歴史上いかに位置づけるべきか検討してみたい。なお、使用する主なテキストは、筑摩書房の『高村光太郎全集』⁽⁵⁾である。

2. 龍星閣の廃業

そもそも『智恵子抄』は、昭和十四年六月頃、『書窓』（昭和十年五月十日発行・第一巻第二号）所収の詩「風にのる智恵子」（昭和十年四月二十五日作）に感動した龍星閣主人澤田伊四郎が、高村光太郎の意志・意向を尊重して昭和十六年八月に発行したものである。

昭和十六年七月十五日、英米が日本資産の凍結を通告し、戦争の足音が次第に高まる中での発行であり、日本軍がハワイを空爆し、英米に対し宣戦布告をしたのは同年十二月八日である。『智恵子抄』は、こうした歴史を背景にしながら版を重ねた。昭和十八年八月十日付けの澤田伊四郎宛て高村のハガキに、

昨日「智恵子抄」第十刷をいただきました、実に立派でむしろ驚きました、今日としては勿体ないやうにさへ感じられます、通覧したところでは今度は誤植も見つかりません、貴下の出版良識はまことに珍重すべきもので此書が貴下のやうな出版者の手によつて刊行せられた事を今更のやうに仕合であつたと痛感します、御礼申し上げます、とあり、また、翌昭和十九年八月三十一日の澤田伊四郎宛て高村のハガキに、「先般『智恵子抄』第十三刷拝受しました」とあることから知られるように、結局、初版は十三刷（昭和十九年三月二十日奥付年月日）をもつて終わる。戦火が激しさを増す戦中であつて、多くの国民が窮乏を極め、用紙不足は出版界に統制と企業合併を余儀なくする中⁽⁶⁾で、『智恵子抄』が版を重ねたのは注目に値する。『智恵子抄』（龍星閣刊）が当時、多くの民衆の視線に触れ得たこともさるこ

とながら、龍星閣の澤田伊四郎の努力が忍ばれる。澤田の努力は版を重ねただけではなく、同年七月五日の澤田伊四郎宛て高村のハガキに、

おてがみ忝拝受更級君からは小生方へもおてがみがありました、「某月某日」「智恵子抄」についてのドイツ向け放送の事は此間独逸国大使館のシェーファー氏から通知がありました、貴下のおかげで智恵子は日本中の女性に愛慕せられ、また光太郎智恵子の男女関係は多くの共感者を得ました、近く貴下宛の揮毫をします、

とあるように、同盟国だったとはいえ、ドイツにまで『智恵子抄』は流布したのである。こうして、『智恵子抄』を発行し、版を重ねたことに対する高村の澤田への感謝の気持ちは、「此書が貴下のやうな出版者の手によつて刊行せられた事を今更のやうに仕合であつたと痛感します、御礼申し上げます」や「近く貴下宛の揮毫をします」などのハガキ、あるいは昭和二十二年四月十一日の鎌田宛て封書の、「『智恵子抄』は澤田さんの並々ならぬ熱意によつて世上にひろく紹介されたので小生澤田さんにひどく感謝している次第です」などの内容に見て取れる。

その後、澤田は第十三刷を最後に、昭和十九年に廃業し、熱海市水口に引越している。昭和十九年二月七日付け澤田宛て宮崎稔のハガキに、「その後御病氣は如何なのですか、高村さんも案じて居外。急に御仕事を止めたことがいいのではないか、版画でもやられるとよからうなどといはれて居ました」と、また、出さずじまいになったという小暮理太郎宛て澤田の書簡⁽⁷⁾に、

龍星閣も、先生のお陰で有名になりましたが、継続する能力が御座居ませんので、廃業することに致しました。「堂堂処子無営無欲」といふ言葉を記憶して居りますが（本当の意味はわかりませぬ）、決戦下、寔にやすらかな気持ちで業を閉ざせる気持を有り難く思つて居ります。しかも、廃業については整備金として慮外の金が入りましたから、先生へ先づ寸志を呈上致します。御本購入の一部に宛てて下されば幸甚です。

とある。この書簡には昭和十九年五月八日の日付が記されている。ドイツ向け放送内容の七月五日のハガキの宛先は、「世田谷区代田」であり、八月三十一日の澤田伊四郎宛て高村のハガキの宛先は熱海市水口である。つまり、昭和十九年二月七日、東京にいた澤田は、第十三刷の仕事をしながら廃業を考え、五月八日、このころ廃業を決意し、七月五日残務整理。八月三十一日頃、熱海に疎開したのである。

その後、戦火の渦に音信は途絶えたようである。翌昭和二十年六月十五日付け澤田伊四郎宛て高村のハガキに、其後大御無沙汰しましたが御健康はいかがかといつも御案じてゐます。小生四月十三日に自宅を焼かれ、五月十五日に東京を離れて花巻の宮澤賢治さんの御実家の御好意で同邸に御厄介になつて居ります。其後肺炎をやんで臥床して居りましたが、今日全快の床上をいたします。天気快晴、五月晴のころよさ一入に存じます。花巻には暫く滞在、此町に作品をのこしたいと思つて居ます。熱海の方の様子まるで分かりませんが切に御安泰をいのります。いづれ又申し上げますが右、

と、昭和十九年八月三十一日の澤田伊四郎宛て高村のハガキにあった、「熱海に移られし由、おからだの為にもよいと存ぜられます」に連続するような内容で始まっている。なお、このハガキは四月十三日のアトリエの焼失、五月十五日の花巻への転居、その後、肺炎を病んでいたことなど、当時の高村光太郎の状況がよく分かり、資料的価値が高い。澤田城子も、「やがて戦火は、駒込林町二十五番地の思い出深い貴重なアトリエを襲い、光太郎は終戦を岩手県の花巻でむかえ、澤田は父祖の地、秋田県鹿角の山村にあった」⁽⁸⁾と、高村と父澤田伊四郎の消息を伝えている。

昭和二十年七月十六日、岩手県花巻から熱海水口の澤田に宛てた高村の、花巻にも米軍機の飛来が頻繁になり、東京からの疎開者の多さが東京大空襲を連想させるハガキを最後に、全集書簡集から澤田はしばらく姿を消す。廃業した澤田は一旦熱海に移り、終戦を秋田で迎えたのである。代わりに、およそ二ヶ月後、後の白玉書房主人の鎌田敬止が頻繁に登場する。

3. 白玉書房刊『智恵子抄』の誕生

終戦の翌月、昭和二十年九月十三日、鎌田敬止宛て高村のハガキに、

おハガキ拝見、罹災お見舞い忝く存じました。小生一ヶ月目の九月十日に表記の処に引き移りました。大田村の小屋にゆくまで当分此所滞っていたします。一先づ落ちつきましたからこれから原稿再起稿をいたします。作曲は能(信)時潔氏に願はうと思つてゐましたが、再考の上これは取りやめいたしました。ただ詩を巻頭にに別組にするにとどめようと思ひます。「花はなにゆゑ」「木の実草の実」二篇です。

とあり、翌昭和二十一年一月十三日付け鎌田宛て高村のハガキに、

電報到着、お言葉により別封小包で検印用印形お送りします。これは平常みとめに使つてゐるので御用ずみの節は御返送願上げます。

今後「道程」が又印刷されるやうな事があつたら初版の内容に復元して初版の通りの目次で出版したらどうかなどと考へました。今の「道程」は初版から随分沢山削除してありますから。とりいそぎ早々

とある。当時、東京大森にいた鎌田が罹災した高村のことを知っていたこと。戦後の混乱の中、鎌田と高村の間に原稿のやりとりがあつたこと。鎌田が高村の詩集『道程』を出版していることなどが分かる。なお、鮫島満は、高村と鎌田の繋がりを大正十年頃からと推定している。⁽⁹⁾

ところで、「小生詩は自然と出来ますが、発表は当分見合はせる氣でゐます」（昭和二十一年七月十日・田村昌由宛ハガキ）。「小生相変らず詩はたくさん書いてゐますが当分発表しません」（昭和二十一年八月一日・西山勇太郎宛ハガキ）。「彫刻の仕事はまだ本格的には出来ませんが、詩はたくさん書いています。今は発表する氣がありません」（昭和二十一年九月十三日・西岡文子宛封書）。「小生詩は生理のやうに出来ますが、当分発表はしまいと考えてゐます」（昭和二十一年十月二十七日・土方定一宛封書）等、これらの手紙は、昭和二十一年における高村の衰えぬ作詩の様子、それと同時に発表は考えていないことを伝えている。

ただ、「別封小包で検印用印形」云々のやりとりの頃、高村が送つた小倉豊文宛て封書の追伸に、「『智恵子抄』は目下手許になく、東京の誰かからそのうちもらふ氣でゐます。入手出来ましたらお送りいたします」（昭和二十一年一月七日付）とあり、『智恵子抄』を求める声のあつたことが分かる。丁度そんな折り、澤田が廃業していたことを鎌田は知っていたのであろうか、高村に『智恵子抄』の重版話を持ちかけている。高村は東京杉並の青磁社仮事務所の鎌田敬止宛てに次のやうな速達を送っている。

おてがみと書留小包拝受、

「道程」十一部及認印たしかに落手いたしました、いろいろ御面倒おかけ恐縮に存じます。仰の如く今度の「道程」は製本おもしろからず、綴の十分ならざるが一ばん気にかかりました。時節柄やむを得ない事と思ふ外ありません。

なお「道程」復元版いつかお出しになるお気持ちある由、小生の申す初版とは山雅房のにはなく、大正四年頃自費にて出版したる最初の版の事であります。山雅房のは既に沢山削除せられて居ります。初版の本は殆ど世の中になく、小生の記憶にては水野葉舟君が多分一冊持つて居られる事とぞんじます。(中略)「智恵子抄」重版の事は小生に異存はありませんが、これは龍星閣澤田伊二郎氏の意向次第です。お気持ちがあつたら熱海水口に居られる筈の澤田氏に御相談なさるやう申します。

(昭和二十一年二月九日)
文中「大正四年」は「大正三年」で、「伊二郎」は「伊四郎」の誤りであるが、とまれ、高村は『道程』初版の重版を希望し、鎌田敬止の『智恵子抄』重版希望を肯定している。ただし、澤田の意向次第という条件付きである。条件付きは昭和二十一年十二月二十六日の宮崎稔宛て高村の速達封書にも「◎出版について一まとめに覚書を左にかきます」と前置きして「澤田伊四郎氏が承諾すれば『智恵子抄』一冊」とある。

このように、昭和二十一年二月九日、青磁社の鎌田は『智恵子抄』の重版の意志を伝え、龍星閣主人澤田伊四郎の承諾があればという条件付きではあるが、高村は重版を認めているのである。認めているだけでなく、翌昭和二十二年四月十一日付け鎌田宛て高村の封書に、

(前略)書店名もきまり、だんだんお仕事が始まりましたことを喜びます。白玉書房は大変美しいと思ひます。(中略)『智恵子抄』の出版を澤田さんが貴下にゆづられる事を承諾せられたやうで、小生としては少しも異存ありません。『智恵子抄』は澤田さんの並々ならぬ熱意によつて世上にひろく紹介されたので小生澤田さんにひどく感謝している次第です。澤田さんが龍星閣を再興された暁には何か小生の力を傾けたものをお願いしたいやうな気がして居ります。

「智恵子抄」は今でもかなり読みたがつてゐる人があるやうで、時々人から質問される事がありますから、今日出版するのも無意味ではないやうに思はれます。

事によつたら昨年あたり新しく書いた智恵子に関する詩を一二篇加へさせていたかどうかとも考えて居ります。とあり、重版の意味付けと新たに詩一、二篇を追加する意欲を見せている。

四月二十八日付け鎌田宛て高村のハガキに、「智恵子抄の追加分は来月お送りします。二篇だけでせう」とあり、六

月四日付け宮崎稔宛てハガキに、「『智恵子抄』の重版にも詩一、二篇加えます」とある。また、六月六日付け鎌田宛て速達封書に、「おてがみをみて又原稿お送りする気になり、今日の雨を幸いに清書しました、今郵便屋さんの時間が迫つてゐるので大急ぎで封をします。いづれあとで又テガミ書くでせう」と記し、翌日高村は、

昨日速達で「智恵子抄」の原稿「松庵寺」「報告」及小文をお送りしました。詩は年代順に最後に入れて下さい。小文は序といふほどのものではないので、後記のやうにして下さい。校正は小生下手なのですべて貴下におまかせいたします。本の体裁は以前のに準じたらいいか、白玉書房として別に考へますか、御意見をおきかせ下さい。と重版に積極的なところを見せている。そればかりか、六月二十日の鎌田宛て封書では、「『智恵子抄』の原稿到着の由にて安心しました」「『智恵子抄』の体裁などもよろしくおまかせいたします」と言い、

今日原稿をよみ直してみて左の訂正をお願いいたしたくなりました。校正の時御訂正願ひ上げます。

「松庵寺」中

否× 和尚さんの衣のすそさへ濡りました。舊 正○ 和尚さんの衣のすそさへ濡れました。訂正

右お願ひいたします。
と、こだわりを見せている。

高村にとってこの重版は嬉しいものであった。同六月三十日には、花澤ふみ子宛てに「白玉書房といふ出版所がそのうちに出来てそこから『智恵子抄』の新らしい版が九月か十月頃出る筈です。二篇追加しました。二篇とも花巻で書いたものです」と伝えている。

ところが、どうしたことか、九月になっても十月になっても鎌田からの連絡がない。高村は、十一月十五日付けで宮崎稔に、「鎌田敬止さんからは長い間便りがありません。御病気ではないかと案じてあます」と、安否を気遣うハガキを送っている。宮崎稔が問い合わせたのであろうか、数日後、高村宛てに鎌田からテガミが届いた。鎌田は病気ではなく、以前所屬していた青磁社のアクシデント⁽¹⁰⁾に奔走していたようである。

ところで、鎌田のテガミの返事に「『智恵子抄』も来月出る由」とあり、また、返事を書いたその筆で宮崎稔宛てハガキに、「『智恵子抄』十二月に出る由」と書く。十二月十五日の宮崎稔宛て封書にも「鎌田さんから此間テガミが来て『智恵子抄』は今月中に出版になるやうな話でした」とある。白玉書房の『智恵子抄』の奥付年月日は、昭和二十二年十一月二十五日であるが、十二月三十一日付け鎌田宛て封書に、「『智恵子抄』の表紙がきれいだと東京からいつて来た人があります。見るのがたのしみに思われれます」とあるから、実際に出来上がったのは十二月の後半だったことが分かる。高村自身心待ちにしていたことは想像に難くない。結局、白玉書房の『智恵子抄』を高村が手にしたのは、昭和二十三年一月四日付け宮崎稔宛て封書に、「昨日鎌田さんから『智恵子抄』三冊送つてきましたから、『道程』復元版特製と一緒に別封でお送りします」とあることから、昭和二十三年一月三日であつたことが分かる。

繰り返すが、こうして高村光太郎の意志による、「松庵寺」（昭和二十年十月五日作）、「報告」（昭和二十一年十月五日作）、「記」（昭和二十二年六月気付）を龍星閣の『智恵子抄』の構成要素に新たに加えた白玉書房の『智恵子抄』が、昭和二十二年十二月後半（奥付年月日は、昭和二十二年十一月二十五日）に誕生したのである。

4. 白玉書房刊『智恵子抄』の終焉

高村は、白玉書房の『智恵子抄』を手にした翌月十日、鎌田敬止に、

二月四日付書留おてがみいただき、小切手（二〇、四〇〇円也）も正におうけとりいたしました。領収書用紙が無いので書きませんが、書く方がよければ用紙お送り下さらばすぐ書きます。

本の売行によつて貴下に迷惑をかけはせぬかとその事を案じます。

「智恵子抄」その後よみ返してゐますが、誤植は今までに見つかりません。これは書物として珍しいと思ひます。龍星閣版には最初かなり誤植があつてだんだんに訂正しました。おからだは十分に御注意下さい。白玉書房を創立した以上、出版者としてのお仕事を心ゆくまでなされなければなりません。今後の日本にとつて出版者の意義は重大です。又それだけ面白い仕事と思ひます。やり甲斐のある仕事です。急がずに確実に貴下流に白玉書房がよい発展をしてゆく事をいのります。

と、エールを送っている。また、同月二十一日、「二月十六日付のおてがみ拝見／白玉書房発足の意義がだんだんはつきりして愉快におもひました。但し小生一本槍といふのは少々危険と思ひます」と、高村は鎌田に書き送っている。そのおよそ二ヶ月後、

「智恵子抄」再版の由、大丈夫かしらと一寸懸念しますが、一切おまかせ申上げます。訂正箇所は発見しません。いつか後日に機会があつたら智恵子の病状記録のやうなものを加へたい気がありますが、これは今中々書けないでせう。これはむしろ精神病研究者の参考として書くつもりなのです。（昭和二十三年四月十一日付鎌田宛ハガキ）と、高村は白玉書房の経営を心配しながらも、再版を認め、更に病状記録の挿入も考えていたことが分かる。

昭和二十三年十二月二十三日付け宮崎稔宛て高村の書留封書に、「東京の出版者がいろいろやつて来て出版の相談をうけますが、うっかり出来ないのと殆ど皆謝絶してゐます。鎌田さんの白玉書房も中々困難のやうです」とあるが、何とか無事に越年、昭和二十四年一月二十七日鎌田宛てハガキに、「おてがみと検印紙といただきました。ますます御元気で仕事に向はれるお気持を読みとる事が出来てよろこびました」とあり、野溝七生子こと鎌田夫人の小説『月影』を発行したり、高村に「すばらしいペイコン」（昭和二十四年二月十六日付鎌田敬止宛・野溝七生子宛てハガキによる）を送るなど、白玉書房は元氣のようだ。翌三月には、

おハガキ三枚と検印紙及「智恵子抄」の小包とは三月四日におうけとりしました。早速捺印して翌五日に発送しましたからもう到着に近いでせう。「智恵子抄」三版の本文紙は大変手触りがよいです。

貴下が販売の方までやつてゐる御苦労を思つてすまないと存じます。（昭和二十四年三月七日付鎌田宛ハガキ）

と、『智恵子抄』第三刷を発行している。結局、白玉書房の『智恵子抄』は、第五刷（昭和二十五年一月）をもって終わるのであるが、時をほぼ同じくして澤田伊四郎の龍星閣が復活する。

昭和二十五年二月八日付け鎌田敬止宛て高村のハガキに、「過日澤田伊四郎氏からテガミがあり、『智恵子抄その後』を一冊として出版させてくれといつて来たので当惑してゐます」とあった。高村は「当惑」はしたものの、既記の通り、『智恵子抄』は澤田さんの並々ならぬ熱意によつて世上にひろく紹介されたので小生澤田さんにひどく感謝している次第です。澤田さんが龍星閣を再興された暁には何か小生の力を傾けたものをお願いしたいやうな気がして居り

ます。

(昭和二十二年四月十一日の高村の鎌田宛封書)
 という思いを実現するべく、「此間澤田伊四郎さんが突然来訪、懇請されたので『智恵子抄その後』六篇と戦後の雑文とを一冊にまとめて出版することを承諾しました」(昭和二十五年五月二十九日付宮崎稔宛封書)と、出版に同意している。草野心平にも「澤田伊四郎さんが『智恵子抄その他』といふ本を出すといつてゐます」(昭和二十五年八月三十日付草野心平宛封書)と伝え、余程嬉しかったのであろう西山勇太郎にも、「『智恵子抄その後』といふのが澤田伊四郎さんの龍星閣再起出版として或は今年中に出るかも知れません」(昭和二十五年九月十六日付西山勇太郎宛ハガキ)と報告している。その一方で高村は、「白玉書房ですがつぶれるでせう」(昭和二十五年九月九日付西山勇太郎宛ハガキ)という。が、白玉書房はその後もちこたえたようで、翌昭和二十六年四月二十四日に送付した鎌田への二枚のハガキ⁽¹⁾に、

四月二十一日付のおてがみ見ました。災厄の連続、御同情申上げます。しかし、悪いことも重なるものですが、又いい事も重なることがあるでせう。「天上の炎」の小生の印税は五分でいいです。この本は余り売れないでせう。今日エルハアランを読む人は少ないでせうから。「ロダン」の装幀は小生の都合で当分出来さうもありませんから、貴下御自身で装幀なさつてもいいことにいたしませう。中央公論社から出る選集中には「ロダン」も当然含まれることを御承知の上に願います。小生只今肋間神経痛にやられてゐます。あたたかなれば治るでせうが。右大要ご返事まで。「ツツク」

「ツツキ」「智恵子抄」については御返事が少々厄介です。

もともと澤田さんが発行してゐたもので、言はば澤田さんによつて地上にひろめられたやうなものですから、白玉書房は一時刊行したものの、龍星閣が復起したとすれば、龍星閣に返して上げたなら如何ですか。さうすればおだやかだと思ひますが如何でせう。

白玉書房で出すとしても、もつとずつと後日に出す方がいいのではないでせうか。御再考願ひます。

とある。更に、高村は鎌田に再考を願つた三日後、

前便で「智恵子抄」は龍星閣にお返しになるのが一番おだやかな処置と申上げ、御再考を願ひました。

詩歌文庫と申される新企画の物へ「智恵子抄」を入れる事ははつきりお断りいたします。従つて印刷されても小生捺印いたしませんから、此旨御諒承下さい。

と、繰り返し、「智恵子抄」を澤田に返すよう強く促している。「智恵子抄」を澤田に返すということは、白玉書房の『智恵子抄』の出版を認めていたことと、二詩「松庵寺」と「報告」、それに「あとがき」の「記」を省いた昭和十六年八月に龍星閣から出版された『智恵子抄』の形態に戻すことを意味している。

つまり、高村の意志によつて、昭和二十二年十二月下旬（奥付年月日は、昭和二十二年十一月二十五日）に誕生した白玉書房の『智恵子抄』は、昭和二十六年四月二十四日、二十七日の三通のハガキに見る高村の意志によつて消滅したことが分かる。従つて、この数年の間、高村が意図したもう一つの『智恵子抄』の存在が、期間限定で認められるのである。

5 まとめ

ところで、白玉書房から『智恵子抄』が出版された翌月、昭和二十三年一月十一日付け森谷均宛て高村の封書に、

（前略）その上出版の事は何だか面倒でやりきれません。

鎌田さんから数日前に「智恵子抄」の再出版の見本を送つて来ましたが、貴下のおてがみによると、澤田さんと十分諒解が無かつたことが分かり、その当時澤田さんの許諾をうけたやうに申された鎌田さんの言を信じてゐた小生としては、何だかみんなイヤになりました。又当分出版に関係するのは止めようかと考へてゐます。

とあり、鎌田が澤田の承諾を受けていなかったらしい情報を得た高村は、十五日に、「昭森社の森谷さんから先日手紙が来て、中に澤田さんが『智恵子抄』再出版をフンガイしてゐるといふ事が書いてありました。面倒な事があるのですか」と、ハガキ（一月十五日の「日記」に「午后テカミ書」とあるのはこのハガキのことか）で鎌田に尋ね（昭和二十三年一月十五日付け鎌田敬止宛）、更に十九日に再び、

「智恵子抄」再出版について澤田さんが森谷均氏にフンガイして話してゐたと森谷氏から手紙の中にあつたので、

何か面倒な事が起つたのかしらと案じてゐます。貴下が澤田さんから承諾を得た事と思つてゐましたが、何か行き違ひがあつたのでせうか。

と封書を送つていた。その後鎌田が事情を高村に知らせたようで、同月二十五日、

速達おてがみ落掌。大変奥さまに御心労をおかけいたしましたすまない気がします。其後届いた鎌田さんからのおてがみで事情が分り、その御返事を差出しました故もう御覧の事と存じます。

「智恵子抄」の小包も昨日届きました。

先日はまるでお便りがなかつたので、何だか様子が分からなかつたのです。

澤田さんとの事には小生関係しない事にいたします。

鎌田さん健康快復の由、尚大切に願ひます。

と、野溝七生子こと鎌田夫人にハガキを送っている(この日の「日記」には関連記事無し)。高村は納得しようであるが、高村が分かつたという事情は残念なことに今不明である。が、昭和二十二年のものと考えられる二月五日付け鎌田敬止宛て澤田の封書¹²に、

拝啓御丁重なる御芳書拝誦致しました。高村先生の御著には版權など、いふものが御座いけませんから先生さへ御よろしければ小生に異議あらう筈は御座いけません。寧ろ先生の御著が一日も早く一冊でも多く出版されることを切に希望してゐるものです。但し小生は出版を放棄したのでは御座いけません。いつでも仕事が出来るやうな充分な余裕と心構を持つて現在の出版界を見てゐる積もりです。むしろ放棄しないために遠ざかつてゐるのです。御わかり下さると思ひます。御手紙ではあたゝ、かいあなたのお氣持をよく感じました。御自愛を祈ります。

勿々敬白

二月五日

澤田伊四郎

鎌田様

追伸、龍星閣の紙型はどなたにもお譲りしないで参りましたからあしからず御容赦下さいませ。

とある。龍星閣（東京市芝区新橋際・復興ビル）の封筒が使用され、表書きには、「東京都大森区調布嶺町一ノ一三四ノ九 鎌田敬止先生」とあり、差し出し日が「二月六日」となっているという。¹³⁾ なお、龍星閣の澤田城子は、『智恵子抄の五十年』（龍星閣・一九九一年十一月二十日発行）の中で、

鎌田が指示に従って熱海に澤田を尋ねたのは十一月末、澤田は秋田にいて不在だった。従って何らの意を通じることも、承諾を得ることもかなわなかった鎌田は、十二月に入り、岩手の光太郎を訪ねている。（中略）

「突然不躰なる手紙さし上げ失礼の段御寛容の程願ひ上げます」として鎌田から澤田に問合せがくるのは昭和二十二年二月であった。ただちに断りの返事が書かれた。その後も、面談して断りを重ねた。

既記の通り、昭和二十五年十月に龍星閣から『智恵子抄その後』¹⁴⁾が上梓されている。その「あとがき」に、先年「智恵子抄」をはじめて世に送ってくれた龍星閣主人澤田伊四郎君が、今度は又、「智恵子抄その後」を、むしろ略奪するやうな勢で出版する。

「智恵子抄」は澤田君が戦後休養のため郷里に隠退してゐた頃、他の出版社が澤田君の快諾をうけ二三の新作を加へて再出版したので、今も世上に行はれてゐるやうであるが、戦後五年を経た今日、澤田君は郷里から上京して龍星閣再興に志し、昔のゆかりに因むものか、まづ私の「智恵子抄その後」に眼をつけた。

とある。明らかに詩の増補は「松庵寺」（昭和二十年十月五日作）と「報告」（昭和二十一年十月五日作）の二詩である。それでは何故、「二三の新作」とし、「今も世上に行はれてゐるやうである」などと醜化したのであるうか。「澤田さんとの事には小生関係しない事にいたします」（昭和二十三年一月二十五日付鎌田敬止宛）あたりに醜化の原因があるかも知れない。その意図は今分らないが、「あとがき」が澤田の意向を踏まえたものであることは、昭和二十五年十月八日付け澤田宛ての封書に次のように明らかである。

おてがみと検印用紙とどきました、○澤田氏を澤田君とする事むろんけつこうです、○「他の出版社が譲りうけ」はなるほど間違つてとられさうだと気づきましたから、「他の出版社が澤田君の快諾をうけ」と訂正します、それから、その項の終りの、○「まづ私の「智恵子抄その後」に眼をつけたものと見える」は「……眼をつけた。」

と訂正します。上の方の文章とのつづき工合で、「ものと見える」が邪魔になる事を感じました。「あとがき」の訂正はこれだけと致します。

鎌田が『智恵子抄』重版を思い立って高村にその旨を申し出たのが昭和二十一年二月、高村は澤田の承諾を条件に許可。二月から十一月迄のおよそ九ヶ月間、鎌田は澤田に連絡をとらなかつたのか、鎌田が澤田を訪ねたのは、澤田城子によれば十一月末である。鎌田が熱海に澤田を尋ねたが不在だったという。翌昭和二十二年二月、澤田は鎌田からの手紙に、直ちに断りの返事を書き、その後、澤田と鎌田は面談を重ねたが、澤田は断り続けたという。が、二月五日付け鎌田敬止宛て澤田の封書に、「高村先生の御著には版權など、いふものが御座いけませんから先生さへ御よろしければ小生に異議あらう筈は御座いませぬ」とあつた。それでは澤田の「断り」とは何だったのか。二月五日付け鎌田敬止宛て澤田の封書の追伸に、「龍星閣の紙型はどなたにもお譲りしないで参りましたがあしからず御容赦下さいませ」とあつた。鎌田は龍星閣の「紙型」を求めたのかも知れない。また、澤田は何に「フンガイ」したのであろうか。今手許にある龍星閣と白玉書房の『智恵子抄』（初版本）を比べると、

- ① 背表紙に出版社名の有無 龍星閣刊 無 白玉書房刊 有
 - ② 白玉書房刊に、詩「松庵寺」詩「報告」あとがき「記」が有るが、龍星閣刊に両詩と「記」無し（従って「目次」に違い有り）。
 - ③ 奥付「智恵子抄」の文字の位置や印の相違
 - ④ 二頁に渡る他本の広告が龍星閣刊には有るが白玉書房刊には無い。
- などの相違があるが、本の大きさ（紙の質による厚さに違いはある）や朱で書かれた中扉の中心に印刷された「詩集智恵子抄 高村光太郎」、また、奥付の四周子持ち匡郭あるいは頁における字数、行数など踏襲していて、活字の僅かな相違から直接龍星閣の「紙型」を使つたものではないことは分かるが、見まがうほどに類似している。鮫島満が紹介した澤田から鎌田に送つた書簡¹⁵には、
- 「高村先生の御本が如何なる書肆によつて如何やうな形になつて（多種多様）刊行されて可憫です」
- 「『智恵子抄その後』は貴殿のものを小生が頂いたのでは御座いけません。『智恵子抄その後』といふ本は私がつく

るまでは、どこにも無かった。先生さへお考へになつてゐませんでした。私は他人がつくつたものをそのまんま頂くやうな憐れな者で御座いません」

と、恰も鎌田が龍星閣刊の『智恵子抄』を「そのまんま頂」いたやうな口振りである。

また、昭和二十五年二月八日付け鎌田敬止宛て高村のハガキに、「過日澤田伊四郎氏からテガミがあり、『智恵子抄その後』を一冊として出版させてくれといつて来たので当惑してゐます」とあつた。鮫島満は高村の「当惑」を、「この時すでに『智恵子抄その後』の出版が鎌田との間で約束されていたのではないか」と推定している。

高村は澤田伊四郎の懇請、『智恵子抄その後』の出版を既記の通り許可していた。高村は戦後の作詩、「元素智恵子」「メトロポール」「裸形」「案内」「あの頃」「吹雪の夜の独白」六編と戦後の雑文とを一冊にまとめて出版することを承諾したのである。この六編の詩は、すべて昭和二十五年一月作である。

『智恵子抄その後』の「あとがき」に、

「智恵子抄その後」と題する一群の詩は六篇しかなく、しかもその六篇は互に有機的に結びついてゐてその間に他の詩篇をさし挟むことも出来ず、又その前後に他の詩篇を追加することも出来ない。さういふことをすれば壊れてしまふ。

とあり、また、『智恵子抄その後』の見本が届いた時、澤田に宛てた高村の封書（昭和二十五年十二月一日付）に、

澤田伊四郎様 「智恵子抄その後」一冊届きました、これは特製本でせうか、いかにも立派です、高い美を感じます。赤の色もふかく、箔字の位置も大きさもいいです。一応よみましたが、誤植にはまだ気がつきません。まつたく「智恵子抄」の終りの方に付け加へようと考へてゐたこの六篇の詩をもとにしてこんな本を造り上げた貴下の力に驚きます。小生としてただ感謝の外ありません。（後略）

とある。高村は、「その前後に他の詩篇を追加することも出来ない。さういふことをすれば壊れてしまふ」と言い、この六編の詩を「『智恵子抄』の終りの方に付け加へようと考へてゐた」という。昭和二十三年四月十一日付けの鎌田宛て高村のハガキに、「『智恵子抄』再版の由、大丈夫かしらと一寸懸念しますが、一切おまかせ申し上げます。訂正箇所は発見しません。いつか後日に機会があつたら智恵子の病状記録のやうなものを加へたい気があります」とあつた。どう

も高村は、鎌田の白玉書房刊『智恵子抄』に新たに作った詩や散文を加えるつもりでいたらしい。

とまれ、既に五版を数えた白玉書房の『智恵子抄』の存在を、「あとがき」で、例のように「『智恵子抄』は澤田君が戦後休養のため郷里に隠退してゐた頃、他の出版社が澤田君の快諾をうけ二三の新作を加へて再出版したので、今も世上に行はれてゐるやうである」と醜化したのは、白玉書房の『智恵子抄』と距離を持ちたい、もっと言えば昭和二十五年秋には認めたくないと言ひ思いが高村のなかにあつたのかも知れない。だとすれば、本当の『智恵子抄』は、やはり昭和十六年八月に龍星閣から出版された『智恵子抄』ということになる。が、既記の通り、鎌田敬止が『智恵子抄』の重版を持ちかけたとき、高村は、詩「松庵寺」と「報告」、それにあとがきの「記」を積極的に増補していた。従つて、昭和二十二年十二月下旬（奥付年月日は、昭和二十二年十一月二十五日）から、昭和二十五年晩秋、龍星閣の『智恵子抄その後』が発行されるまでの数年間、あるいは「前便で『智恵子抄』は龍星閣にお返しになるのが一番おだやかな処置と申上げ、御再考を願ひました。／詩歌文庫と申される新企画の物へ『智恵子抄』を入れる事ははつきりお断りいたします」と、昭和二十六年四月二十七日のハガキに見た高村の意志から、この頃まで高村が意図したもう一つの『智恵子抄』の存在を、期間限定で認めてもいいと私は思うのである。

注1 升谷は注1の中で、「『東京に空がない』といった智恵子の挿話を、『風景としての（空）の問題である以上に心理の問題であつた』

とも郷原氏は述べているが、それが（生死にかかわる重大事）となつたのはむしろ智恵子自身が自ら抱えた問題としてうけとめるべきではないか」として、「高村智恵子という一人の女性にとつて、その狂死は痛ましい事実である。けれども、智恵子その人が求めようとしていたものは、やはり『智恵子抄』のそこそこに結晶しているのである。『智恵子抄』に語られていない現実も智恵子自身の一生の中にある。けれどもそれは決して（偶像）などではない高村智恵子が、自身の選択した生を自己の責任の上に踏破した、他のどんな人生にも劣らない、真実の記録なのである」という。

- 注2 大島龍彦・大島裕子編著『「智恵子抄」の世界』（2004・4/2新典社刊）所収による。
- 注3 『「智恵子抄」』（新潮文庫・昭和四十二年十二月十五日・改版）「覚え書」による。
- 注4 「昭和二十二年六月六日付け鎌田宛てテガミ」による。
- 注5 『高村光太郎全集』（筑摩書房刊・一九九六年十一月三十日）による。
- 注6 澤田城子『「智恵子抄」の五十年』（龍星閣刊・一九九一年十一月二十日）による。
- 注7 注6に同じ。
- 注8 注6に同じ。
- 注9 鮫島満「鎌田敬止研究（二）——高村光太郎との関係をめぐって（二）——」（『明星学苑研究紀要』第二十五号・平成十四年十月三十一日発行）による。
- 注10 注9に同じ。
- 注11 「全集補遺」（第四十八回連翹記・平成十六年四月二日）による。
- 注12 注9に同じ。
- 注13 注9に同じ。
- 注14 『「智恵子抄その後」』（龍星閣刊・昭和二十五年十一月十五日）「あとがき」による。
- 注15 注9に同じ。

（二〇〇四年一〇月一日受理）

